

No.2915

文化的他者が取り組む先住民文化

—ニュージーランド・マオリの伝統芸能への参加をめぐるダイナミクス—

神戸大学大学院国際文化研究科

博士後期課程

土井 冬樹

本活動の目的は、ニュージーランドの先住民マオリの歌や踊りであるカパハカが、民族の枠を超えて実践されている現状を人類学的な現地調査を用いて調査・分析し、先住民と主流社会の和解に関して、新しい関係のあり方の具体的内容を論じることである。

2018年度には、ニュージーランドの小学校、警察学校、オーストラリアで結成されたマオリと非マオリによって組織されたカパハカに取り組むグループの調査を行った。

対象とした小学校では、在校生の90%以上がマオリで、かれらの文化的アイデンティティを確立するために、カパハカは必修の授業として取り組まれていた。その結果、非マオリの生徒もカパハカを学ぶこととなっており、それがひいては、マオリ文化を学ぶことにつながっていた。

似た傾向は警察の学びの中にも見ることができた。警察は、組織の踊りとしてマオリの踊りを採用しており、その学びの過程でマオリ文化に触れるのだった。警察学校では、上記の小学校とは反対に非マオリがおよそ90%を占めている。今までマオリ文化に触れたことが一度もない人たちにとっては衝撃的な文化との接触で、その経験の結果マオリ文化に興味を持った、と話す人も少なくなかった。

オーストラリアでは、自殺撲滅を掲げてカパハカのパフォーマンスをするグループが結成されていた。20人ほどの小さなグループで、非マオリの参加者は全体の5%だった。

カパハカという文化的俎上において、マオリと非マオリの対立はほとんど見られず、互いを寛容に受け入れているように見えた。報告者はトップダウンで決められる「文化の共有モデル」という仮説を立てたが、オーストラリアのグループはトップダウン式ではないものの、上記二つの組織と同じように非マオリに対する寛容性が見られた。マオリは、必ずしも伝統舞踊の実践を当該民族内に閉じているとは言えなさそうである。

今後の調査で、これまで訴訟や批判があった事例との差異、非マオリの存在が認められていく過程を明らかにしていきたい。